

カール・ディーツェル

# 「国民経済との関連よりみたる国債制度」 (一)

池 田 浩 太 郎

訳者のまえがき

成城大学経済学会会誌委員の許可をえて、ここに訳文を連載させていただくはこびとなった書物の原名は Carl Dietzel, Das System der Staatsanleihen im Zusammenhang der Volkswirtschaft betrachtet, Heidelberg 1855, 227 S. という。カール・ディーツェル著「国民経済との関連よりみたる国債制度」(以下の解説では「国債制度」と略称させていた)とでも訳しておこう。

カール・ディーツェルの名前は財政学を学ぶ者、ことに公債論を研究する者にとっては必ず耳にするところである。しかしディーツェルその人と彼の経済・財政学説や、本訳業の原著書にかんする内在的な解明、批判に国民経済との関連よりみたる国債制度(一)

## 国民経済との関連よりみたる国債制度(一)

ついで、いまだ日本では充分になされているとはいいがたい。だが、これらについて訳者の所見を發表するとは別の機会にゆずりたいとおもう。

本訳業の原著書が財政学上、とくに公債論上必読の古典的名著といわれておりながら、しかも日本の読者にとっては原著書の全貌に接することがきわめてむづかしいこと(寡聞にして訳者は慶応大学の高木寿一教授以外この書物をお持ちの方を承知していない)、カール・ディーツェルの公債論の研究が訳者の十九世紀ドイツ財政学説研究のひとつの柱となること、このふたつの理由をもってあえて訳者はこの書物の邦訳を企てるにいたったのである。

カール・ディーツェルの「国債制度」は、国家の精神的意義を極端にまで重視し、しかもかかる国家活動の国民経済的生産性をつよく主張している点、公信用あるいは国債制度の国民経済の発展にたいする有効なる作用を詳述している点、などにおいて、彼の論旨や論述はきわめて明快であると時折いわれている。それはたしかにその通りではある。しかしこの書物の邦訳をつづけている訳者の率直なる感想をいわせていただければ、この書物の邦訳は訳者にとって予想以上に面倒なものであった。勿論訳者の浅学がその根本理由であることは重々反省している。しかし原著書の独文そのものは蛇のように長いくだしい構造であり、しかも非常に多く使われている代名詞なども文法的には多義的な使用方法である。いきおい訳者が読解にくるしむこともすくなくはなかつたのである。これについてあれこれおもいをめぐらせているうちに訳者はディーツェル自身のこの点にたいする弁明に遭遇した。すなわち、ディーツェルの著作 *Die Volkswirtschaft und ihr Verhältnis zu Gesellschaft und Staat*, Frankfurt am Main 1864. の序文中に示されているものがこれである。

彼はここで、「国債制度」の公刊をあわててなさざるをえなくなった外的事情をのべ、つづけていう。「その

ために誤解を受けやすいと私自身が認めざるをえないような表現のし方が数多くのこることとなった。しかも他方正しい理解のために必須な程度にまでは充分に論じつくさなかったのだ。このような事情があるので、今後この書物を手にされる方々や、あるいはこの書物にたいしすでにある種の見解をおもちの方々すべてにお願いしたいことは、この書物の全思想行程をはっきりと読みとり、個々の、疑義を生ぜしめるような語句や文章を、その思想全行程の基本精神に則って明らかにするようにしてもらいたいということである」(Vorwort, VII)。

勿論ディーツェルの弁明をもって、訳文の拙劣さや誤訳などへの言訳とはしないつもりである。翻訳については一般の慣行にしたがった。尚とくに気づいた点を二、三付記しておこう。

一、原著者が他の書物を引用するにあたっては、引用書名の記述方法に精粗の差がおおいにあり、しかも一般に粗雑な取扱いをしている。きわめて不体裁かつ不親切な引用といえるであろう。この翻訳では可能なかぎりディーツェルの引用書目の原典にあたり、引用書名を完全に記述するようつとめたつもりである。ただし訳文では、そのことを一々おことわりしていない。

二、ドイツ語の推定を容易にするために、*Staatsanleihen* を国債とし、*Staatsschuld* を国家債務と一応訳してみた。勿論日本語としては両者を同一表現に統一してもすこしも差支えなかったとおもう。

尚この他に特に記すべきことが生ずれば、次回以降適時に付加させていただくことになるろう。

訳者の不明ないし不注意、あるいは努力の足らざる故をもって、誤訳、不適訳なども数多くあることと思う。御教示をいただければ幸いである。早速次回以降で訂正するつもりである。

## 第一章 序 論

人類の發展史上で近世という時代を特徴づけるものであり、しかも諸國民の一般的福祉におおきな影響をあたえたことにより、以前の時期とのあらゆる比較を絶するほどに近世をきわだたせているいくつかの偉大な現象があるが、そのうちとくにひとつの現象が他にぬきこんでいる。この現象はその成立の様式や作用の広大さの点で觀察者の心には不可解にして、かつ圧倒的なものに映ずるであらう。

この現象とは、すなわち、近世諸國民がその目的達成のために調達しうる物的補助手段の巨額さであり、しかもとくに近世諸國民がこれをくみとりうる源泉の無尽蔵さなのである。ヨーロッパ先進諸國民が物質的・精神的福祉の増大という巨大な進歩によってひろめた名声と栄光とは、たといその最大部分ではないにしてもかなりの部分が、諸國民のこの能力と秘められた力に、すなわち、諸國民にこれをなしうる能力をあたえたあとと見えがたいものに帰属するであらう。

この秘められた力、とらえがたい何ものか、これがすなわち信用なのである。十八世紀のはじめにおこり、そしてわれわれが國民經濟的と名づけた、新原理にもとづく諸國家發展において、信用こそはそのおおいなる原因であるとともに、またその結果でもあるのだ。この原理が國民經濟的であるといわれる所以は、すべての人々の団結力のはたらきによる全國民の福祉増進ということがらが、十八世紀はじめ以来國家という団体の主目標として意識的に追求されてきた事由によっている。かくて信用は、これが制度として使用されることによって、はじめて現代史を、それ以前の數百年、數千年にわたる全時期からわかつことになるのである。信用こそが、近代を

「他の時代から劃然と」特徴づけるおおいなる差異のすべてを生じさせたものなのである。かくて信用は偶然的現象でもなく、また恣意的に作られたものでもない。いやしくもそれ以上の發展が可能とされる場合に、これはかなり高い段階において当然生ずるような人間發展途上の必然的一項を形成するのである。国富と国力との増大ということは当然これらのものを維持し、増進させる手段をますます大規模に展開させる。もし信用が与えた力を借りなかったならば、この百年間におけるヨーロッパの大動乱と改革とは生じなかったであろう。ましてや、いまわれわれが現に享受しているような実り豊かな成果はうみだされなかったであろうとおもわれる。

国家信用が未知のあたらしい力として諸国民の生活に入り込んできたときに、これは必然的に公衆の注意をひくものとなった。しかし同時に国家信用がはじめて登場するにあたり、しかもそれが事物の自然状態からとり出されてある程度完全に形成されるにいたる以前にあっては、その真の本質が把握されなかったのは理の当然であった。それゆえまた著作家や一般公衆が国家信用を評価するときとおなじく、政治家が国家信用を使用する場合にも思いちがいや誤りにおちいったのも無理からぬことであつたであらう。にもかかわらず、国家信用はそのわずかな端緒から、自己のもつ内在的・自然法則的必然性をもって不斷に發展し、遂にわれわれが今日みるような目もくらむ高さへと漸次到達していったのである。

国家信用理論がいまだ国家信用の本質と作用との充分なる解明をなしていないとはいえ、国家信用ほど實際的にも理論的にも發展しているものは国民經濟の他の分野のうちにはまず存在しないといえるであらう。国家信用の發展を一瞥すればこの間の事情は一目瞭然となる。

イギリスは本来的意味での国家信用の祖国である。イギリスではウィリアム三世の革命政府が臨時軍事費に充  
国民經濟との関連よりみたる國債制度(一)

国民経済との関連よりみたる国債制度(一)

当すべき資金 (Capital) の調達にあたり、私信用による調達という従来普通であった調達方法を廃止し、漸次これにかえて元本を全然償還しない永久利子による資金調達方法の採用が必要であると考えた一六九〇年代以来、国家信用は徐々にできあがってきた。一六九四年のイングランド銀行創設にあたり、同銀行が政府に融通した百二十万ポンドの資金をもって、イギリス国債制度の嚆矢であるとみなしてよいであろう。何故ならば借りた元本を償還しないつもりで政府は同行に特権を授与したからである。ウィリアム三世は一千万ポンドの債務を残した。<sup>1)</sup>

1) この統計は後出のものとおなじく Bernhard Cohen, *Compendium of Finance, etc.*, London 1822 によった。本書ではイギリス国家債務の成長のおおまかな姿をとらえることのみが重要であるから、他の著作家たちのちがった数字についてはちがいないことにする。勿論これらを引用することもまた余計なことであろう。

かかる目立たない端緒より国家債務は十八世紀を通じて不断に成長した。とくにこれは長期かつ巨費を投じた戦争の結果増大したのである。各戦争後における国家債務残高を端数なしで示しておけば本書の目的のためには充分であるといえよう。

1714年	5,000万ポンド	
1763年	1 億4,000	"
1786年	2 億6,800	"
1802年	6 億2,000	"
1815年	8 億6,000	"

国家信用の真の本質についての政治家的洞察や学問的認識は、国家信用の使用が急上昇的に増大するのと歩をおなじくはしなかった。国家信用は熟慮と計画なしにできあがったものであり、しかも政府が私的借入れにもとづく債務を弁済しえなかったがために出現したものである。したがって国家信用がより一層の増大へとかりたてられた理由は国家信用の合目的性や長所にたいする明確なる洞察があったからではない。むしろ時々の境遇の圧力、とくに

不可避であった戦争のための入用の圧力にもとづくものだったのである。国家信用の歴史的発展についてはここではこれ以上たちいらない。国家信用理論の発展を簡単に考察するだけにとどめたいとおもう。

国家信用の理論は国家信用の成立以来はほぼ一貫してこれに敵対的立場をとってきた。経済学的認識のひくい当時の状態においてはこれもいたしかたのないことであつたであらう。当時の人々はマーカンティリズムの一面的かつ狭量な見解にとらわれていたり、またフィジオクラートのごとく土地に定着させた資本の使用以外はすべて非生産的であるというような見解に与していたので、国家債務の存在そのものの不可解さにおそれをなし、同時にその作用の大規模さにも驚嘆していた始末であつた。国家債務ができあがつた当初においてさえ人々はこれを国家の手にあまる性質のものともみなしていたのである。もし国家信用制度をしめ出さなければイギリス国民は近い将来に没落するであらうと、十八世紀を通じていたのである。周知のようにヒュームは「国民が国家信用を撲滅しなければ、国家信用が国民を滅ぼす<sup>注①</sup>」と言つた。ビットが遂行した減債基金計画の起案者であるプライス博士も後に同様のことをのべた。ここでは国民経済の全理論の天才的創設者であつたスミスをあげるだけで他のすべての者にかえてよいであらう。彼は国家債務を「破滅的年金公債制度<sup>1)</sup>」にほかならぬものとして述べているのである。

1) たとへば Nationalreichthum, übers. v. Garve, 1799, Bd. 4, S. 425. 参照〔本書の引用は以下ではスミス、国富論、独訳と略す〕。

注② この言葉は David Hume の Of Public Credit とする論文にみられる。J. R. McCulloch (ed.), A Select Collection of Scarce and Valuable Tracts and Other Publications on the National Debt and the Sinking of the National Debt and the Sinking of the National Debt (London, 1844, 1845, 1846, 1847, 1848, 1849, 1850, 1851, 1852, 1853, 1854, 1855, 1856, 1857, 1858, 1859, 1860, 1861, 1862, 1863, 1864, 1865, 1866, 1867, 1868, 1869, 1870, 1871, 1872, 1873, 1874, 1875, 1876, 1877, 1878, 1879, 1880, 1881, 1882, 1883, 1884, 1885, 1886, 1887, 1888, 1889, 1890, 1891, 1892, 1893, 1894, 1895, 1896, 1897, 1898, 1899, 1900, 1901, 1902, 1903, 1904, 1905, 1906, 1907, 1908, 1909, 1910, 1911, 1912, 1913, 1914, 1915, 1916, 1917, 1918, 1919, 1920, 1921, 1922, 1923, 1924, 1925, 1926, 1927, 1928, 1929, 1930, 1931, 1932, 1933, 1934, 1935, 1936, 1937, 1938, 1939, 1940, 1941, 1942, 1943, 1944, 1945, 1946, 1947, 1948, 1949, 1950, 1951, 1952, 1953, 1954, 1955, 1956, 1957, 1958, 1959, 1960, 1961, 1962, 1963, 1964, 1965, 1966, 1967, 1968, 1969, 1970, 1971, 1972, 1973, 1974, 1975, 1976, 1977, 1978, 1979, 1980, 1981, 1982, 1983, 1984, 1985, 1986, 1987, 1988, 1989, 1990, 1991, 1992, 1993, 1994, 1995, 1996, 1997, 1998, 1999, 2000, 2001, 2002, 2003, 2004, 2005, 2006, 2007, 2008, 2009, 2010, 2011, 2012, 2013, 2014, 2015, 2016, 2017, 2018, 2019, 2020, 2021, 2022, 2023, 2024, 2025, 2026, 2027, 2028, 2029, 2030, 2031, 2032, 2033, 2034, 2035, 2036, 2037, 2038, 2039, 2040, 2041, 2042, 2043, 2044, 2045, 2046, 2047, 2048, 2049, 2050, 2051, 2052, 2053, 2054, 2055, 2056, 2057, 2058, 2059, 2060, 2061, 2062, 2063, 2064, 2065, 2066, 2067, 2068, 2069, 2070, 2071, 2072, 2073, 2074, 2075, 2076, 2077, 2078, 2079, 2080, 2081, 2082, 2083, 2084, 2085, 2086, 2087, 2088, 2089, 2090, 2091, 2092, 2093, 2094, 2095, 2096, 2097, 2098, 2099, 2100, 2101, 2102, 2103, 2104, 2105, 2106, 2107, 2108, 2109, 2110, 2111, 2112, 2113, 2114, 2115, 2116, 2117, 2118, 2119, 2120, 2121, 2122, 2123, 2124, 2125, 2126, 2127, 2128, 2129, 2130, 2131, 2132, 2133, 2134, 2135, 2136, 2137, 2138, 2139, 2140, 2141, 2142, 2143, 2144, 2145, 2146, 2147, 2148, 2149, 2150, 2151, 2152, 2153, 2154, 2155, 2156, 2157, 2158, 2159, 2160, 2161, 2162, 2163, 2164, 2165, 2166, 2167, 2168, 2169, 2170, 2171, 2172, 2173, 2174, 2175, 2176, 2177, 2178, 2179, 2180, 2181, 2182, 2183, 2184, 2185, 2186, 2187, 2188, 2189, 2190, 2191, 2192, 2193, 2194, 2195, 2196, 2197, 2198, 2199, 2200, 2201, 2202, 2203, 2204, 2205, 2206, 2207, 2208, 2209, 2210, 2211, 2212, 2213, 2214, 2215, 2216, 2217, 2218, 2219, 2220, 2221, 2222, 2223, 2224, 2225, 2226, 2227, 2228, 2229, 2230, 2231, 2232, 2233, 2234, 2235, 2236, 2237, 2238, 2239, 2240, 2241, 2242, 2243, 2244, 2245, 2246, 2247, 2248, 2249, 2250, 2251, 2252, 2253, 2254, 2255, 2256, 2257, 2258, 2259, 2260, 2261, 2262, 2263, 2264, 2265, 2266, 2267, 2268, 2269, 2270, 2271, 2272, 2273, 2274, 2275, 2276, 2277, 2278, 2279, 2280, 2281, 2282, 2283, 2284, 2285, 2286, 2287, 2288, 2289, 2290, 2291, 2292, 2293, 2294, 2295, 2296, 2297, 2298, 2299, 2300, 2301, 2302, 2303, 2304, 2305, 2306, 2307, 2308, 2309, 2310, 2311, 2312, 2313, 2314, 2315, 2316, 2317, 2318, 2319, 2320, 2321, 2322, 2323, 2324, 2325, 2326, 2327, 2328, 2329, 2330, 2331, 2332, 2333, 2334, 2335, 2336, 2337, 2338, 2339, 2340, 2341, 2342, 2343, 2344, 2345, 2346, 2347, 2348, 2349, 2350, 2351, 2352, 2353, 2354, 2355, 2356, 2357, 2358, 2359, 2360, 2361, 2362, 2363, 2364, 2365, 2366, 2367, 2368, 2369, 2370, 2371, 2372, 2373, 2374, 2375, 2376, 2377, 2378, 2379, 2380, 2381, 2382, 2383, 2384, 2385, 2386, 2387, 2388, 2389, 2390, 2391, 2392, 2393, 2394, 2395, 2396, 2397, 2398, 2399, 2400, 2401, 2402, 2403, 2404, 2405, 2406, 2407, 2408, 2409, 2410, 2411, 2412, 2413, 2414, 2415, 2416, 2417, 2418, 2419, 2420, 2421, 2422, 2423, 2424, 2425, 2426, 2427, 2428, 2429, 2430, 2431, 2432, 2433, 2434, 2435, 2436, 2437, 2438, 2439, 2440, 2441, 2442, 2443, 2444, 2445, 2446, 2447, 2448, 2449, 2450, 2451, 2452, 2453, 2454, 2455, 2456, 2457, 2458, 2459, 2460, 2461, 2462, 2463, 2464, 2465, 2466, 2467, 2468, 2469, 2470, 2471, 2472, 2473, 2474, 2475, 2476, 2477, 2478, 2479, 2480, 2481, 2482, 2483, 2484, 2485, 2486, 2487, 2488, 2489, 2490, 2491, 2492, 2493, 2494, 2495, 2496, 2497, 2498, 2499, 2500, 2501, 2502, 2503, 2504, 2505, 2506, 2507, 2508, 2509, 2510, 2511, 2512, 2513, 2514, 2515, 2516, 2517, 2518, 2519, 2520, 2521, 2522, 2523, 2524, 2525, 2526, 2527, 2528, 2529, 2530, 2531, 2532, 2533, 2534, 2535, 2536, 2537, 2538, 2539, 2540, 2541, 2542, 2543, 2544, 2545, 2546, 2547, 2548, 2549, 2550, 2551, 2552, 2553, 2554, 2555, 2556, 2557, 2558, 2559, 2560, 2561, 2562, 2563, 2564, 2565, 2566, 2567, 2568, 2569, 2570, 2571, 2572, 2573, 2574, 2575, 2576, 2577, 2578, 2579, 2580, 2581, 2582, 2583, 2584, 2585, 2586, 2587, 2588, 2589, 2590, 2591, 2592, 2593, 2594, 2595, 2596, 2597, 2598, 2599, 2600, 2601, 2602, 2603, 2604, 2605, 2606, 2607, 2608, 2609, 2610, 2611, 2612, 2613, 2614, 2615, 2616, 2617, 2618, 2619, 2620, 2621, 2622, 2623, 2624, 2625, 2626, 2627, 2628, 2629, 2630, 2631, 2632, 2633, 2634, 2635, 2636, 2637, 2638, 2639, 2640, 2641, 2642, 2643, 2644, 2645, 2646, 2647, 2648, 2649, 2650, 2651, 2652, 2653, 2654, 2655, 2656, 2657, 2658, 2659, 2660, 2661, 2662, 2663, 2664, 2665, 2666, 2667, 2668, 2669, 2670, 2671, 2672, 2673, 2674, 2675, 2676, 2677, 2678, 2679, 2680, 2681, 2682, 2683, 2684, 2685, 2686, 2687, 2688, 2689, 2690, 2691, 2692, 2693, 2694, 2695, 2696, 2697, 2698, 2699, 2700, 2701, 2702, 2703, 2704, 2705, 2706, 2707, 2708, 2709, 2710, 2711, 2712, 2713, 2714, 2715, 2716, 2717, 2718, 2719, 2720, 2721, 2722, 2723, 2724, 2725, 2726, 2727, 2728, 2729, 2730, 2731, 2732, 2733, 2734, 2735, 2736, 2737, 2738, 2739, 2740, 2741, 2742, 2743, 2744, 2745, 2746, 2747, 2748, 2749, 2750, 2751, 2752, 2753, 2754, 2755, 2756, 2757, 2758, 2759, 2760, 2761, 2762, 2763, 2764, 2765, 2766, 2767, 2768, 2769, 2770, 2771, 2772, 2773, 2774, 2775, 2776, 2777, 2778, 2779, 2780, 2781, 2782, 2783, 2784, 2785, 2786, 2787, 2788, 2789, 2790, 2791, 2792, 2793, 2794, 2795, 2796, 2797, 2798, 2799, 2800, 2801, 2802, 2803, 2804, 2805, 2806, 2807, 2808, 2809, 2810, 2811, 2812, 2813, 2814, 2815, 2816, 2817, 2818, 2819, 2820, 2821, 2822, 2823, 2824, 2825, 2826, 2827, 2828, 2829, 2830, 2831, 2832, 2833, 2834, 2835, 2836, 2837, 2838, 2839, 2840, 2841, 2842, 2843, 2844, 2845, 2846, 2847, 2848, 2849, 2850, 2851, 2852, 2853, 2854, 2855, 2856, 2857, 2858, 2859, 2860, 2861, 2862, 2863, 2864, 2865, 2866, 2867, 2868, 2869, 2870, 2871, 2872, 2873, 2874, 2875, 2876, 2877, 2878, 2879, 2880, 2881, 2882, 2883, 2884, 2885, 2886, 2887, 2888, 2889, 2890, 2891, 2892, 2893, 2894, 2895, 2896, 2897, 2898, 2899, 2900, 2901, 2902, 2903, 2904, 2905, 2906, 2907, 2908, 2909, 2910, 2911, 2912, 2913, 2914, 2915, 2916, 2917, 2918, 2919, 2920, 2921, 2922, 2923, 2924, 2925, 2926, 2927, 2928, 2929, 2930, 2931, 2932, 2933, 2934, 2935, 2936, 2937, 2938, 2939, 2940, 2941, 2942, 2943, 2944, 2945, 2946, 2947, 2948, 2949, 2950, 2951, 2952, 2953, 2954, 2955, 2956, 2957, 2958, 2959, 2960, 2961, 2962, 2963, 2964, 2965, 2966, 2967, 2968, 2969, 2970, 2971, 2972, 2973, 2974, 2975, 2976, 2977, 2978, 2979, 2980, 2981, 2982, 2983, 2984, 2985, 2986, 2987, 2988, 2989, 2990, 2991, 2992, 2993, 2994, 2995, 2996, 2997, 2998, 2999, 3000, 3001, 3002, 3003, 3004, 3005, 3006, 3007, 3008, 3009, 3010, 3011, 3012, 3013, 3014, 3015, 3016, 3017, 3018, 3019, 3020, 3021, 3022, 3023, 3024, 3025, 3026, 3027, 3028, 3029, 3030, 3031, 3032, 3033, 3034, 3035, 3036, 3037, 3038, 3039, 3040, 3041, 3042, 3043, 3044, 3045, 3046, 3047, 3048, 3049, 3050, 3051, 3052, 3053, 3054, 3055, 3056, 3057, 3058, 3059, 3060, 3061, 3062, 3063, 3064, 3065, 3066, 3067, 3068, 3069, 3070, 3071, 3072, 3073, 3074, 3075, 3076, 3077, 3078, 3079, 3080, 3081, 3082, 3083, 3084, 3085, 3086, 3087, 3088, 3089, 3090, 3091, 3092, 3093, 3094, 3095, 3096, 3097, 3098, 3099, 3100, 3101, 3102, 3103, 3104, 3105, 3106, 3107, 3108, 3109, 3110, 3111, 3112, 3113, 3114, 3115, 3116, 3117, 3118, 3119, 3120, 3121, 3122, 3123, 3124, 3125, 3126, 3127, 3128, 3129, 3130, 3131, 3132, 3133, 3134, 3135, 3136, 3137, 3138, 3139, 3140, 3141, 3142, 3143, 3144, 3145, 3146, 3147, 3148, 3149, 3150, 3151, 3152, 3153, 3154, 3155, 3156, 3157, 3158, 3159, 3160, 3161, 3162, 3163, 3164, 3165, 3166, 3167, 3168, 3169, 3170, 3171, 3172, 3173, 3174, 3175, 3176, 3177, 3178, 3179, 3180, 3181, 3182, 3183, 3184, 3185, 3186, 3187, 3188, 3189, 3190, 3191, 3192, 3193, 3194, 3195, 3196, 3197, 3198, 3199, 3200, 3201, 3202, 3203, 3204, 3205, 3206, 3207, 3208, 3209, 3210, 3211, 3212, 3213, 3214, 3215, 3216, 3217, 3218, 3219, 3220, 3221, 3222, 3223, 3224, 3225, 3226, 3227, 3228, 3229, 3230, 3231, 3232, 3233, 3234, 3235, 3236, 3237, 3238, 3239, 3240, 3241, 3242, 3243, 3244, 3245, 3246, 3247, 3248, 3249, 3250, 3251, 3252, 3253, 3254, 3255, 3256, 3257, 3258, 3259, 3260, 3261, 3262, 3263, 3264, 3265, 3266, 3267, 3268, 3269, 3270, 3271, 3272, 3273, 3274, 3275, 3276, 3277, 3278, 3279, 3280, 3281, 3282, 3283, 3284, 3285, 3286, 3287, 3288, 3289, 3290, 3291, 3292, 3293, 3294, 3295, 3296, 3297, 3298, 3299, 3300, 3301, 3302, 3303, 3304, 3305, 3306, 3307, 3308, 3309, 3310, 3311, 3312, 3313, 3314, 3315, 3316, 3317, 3318, 3319, 3320, 3321, 3322, 3323, 3324, 3325, 3326, 3327, 3328, 3329, 3330, 3331, 3332, 3333, 3334, 3335, 3336, 3337, 3338, 3339, 3340, 3341, 3342, 3343, 3344, 3345, 3346, 3347, 3348, 3349, 3350, 3351, 3352, 3353, 3354, 3355, 3356, 3357, 3358, 3359, 3360, 3361, 3362, 3363, 3364, 3365, 3366, 3367, 3368, 3369, 3370, 3371, 3372, 3373, 3374, 3375, 3376, 3377, 3378, 3379, 3380, 3381, 3382, 3383, 3384, 3385, 3386, 3387, 3388, 3389, 3390, 3391, 3392, 3393, 3394, 3395, 3396, 3397, 3398, 3399, 3400, 3401, 3402, 3403, 3404, 3405, 3406, 3407, 3408, 3409, 3410, 3411, 3412, 3413, 3414, 3415, 3416, 3417, 3418, 3419, 3420, 3421, 3422, 3423, 3424, 3425, 3426, 3427, 3428, 3429, 3430, 3431, 3432, 3433, 3434, 3435, 3436, 3437, 3438, 3439, 3440, 3441, 3442, 3443, 3444, 3445, 3446, 3447, 3448, 3449, 3450, 3451, 3452, 3453, 3454, 3455, 3456, 3457, 3458, 3459, 3460, 3461, 3462, 3463, 3464, 3465, 3466, 3467, 3468, 3469, 3470, 3471, 3472, 3473, 3474, 3475, 3476, 3477, 3478, 3479, 3480, 3481, 3482, 3483, 3484, 3485, 3486, 3487, 3488, 3489, 3490, 3491, 3492, 3493, 3494, 3495, 3496, 3497, 3498, 3499, 3500, 3501, 3502, 3503, 3504, 3505, 3506, 3507, 3508, 3509, 3510, 3511, 3512, 3513, 3514, 3515, 3516, 3517, 3518, 3519, 3520, 3521, 3522, 3523, 3524, 3525, 3526, 3527, 3528, 3529, 3530, 3531, 3532, 3533, 3534, 3535, 3536, 3537, 3538, 3539, 3540, 3541, 3542, 3543, 3544, 3545, 3546, 3547, 3548, 3549, 3550, 3551, 3552, 3553, 3554, 3555, 3556, 3557, 3558, 3559, 3560, 3561, 3562, 3563, 3564, 3565, 3566, 3567, 3568, 3569, 3570, 3571, 3572, 3573, 3574, 3575, 3576, 3577, 3578, 3579, 3580, 3581, 3582, 3583, 3584, 3585, 3586, 3587, 3588, 3589, 3590, 3591, 3592, 3593, 3594, 3595, 3596, 3597, 3598, 3599, 3600, 3601, 3602, 3603, 3604, 3605, 3606, 3607, 3608, 3609, 3610, 3611, 3612, 3613, 3614, 3615, 3616, 3617, 3618, 3619, 3620, 3621, 3622, 3623, 3624, 3625, 3626, 3627, 3628, 3629, 3630, 3631, 3632, 3633, 3634, 3635, 3636, 3637, 3638, 3639, 3640, 3641, 3642, 3643, 3644, 3645, 3646, 3647, 3648, 3649, 3650, 3651, 3652, 3653, 3654, 3655, 3656, 3657, 3658, 3659, 3660, 3661, 3662, 3663, 3664, 3665, 3666, 3667, 3668, 3669, 3670, 3671, 3672, 3673, 3674, 3675, 3676, 3677, 3678, 3679, 3680, 3681, 3682, 3683, 3684, 3685, 3686, 3687, 3688, 3689, 3690, 3691, 3692, 3693, 3694, 3695, 3696, 3697, 3698, 3699, 3700, 3701, 3702, 3703, 3704, 3705, 3706, 3707, 3708, 3709, 3710, 3711, 3712, 3713, 3714, 3715, 3716, 3717, 3718, 3719, 3720, 3721, 3722, 3723, 3724, 3725, 3726, 3727, 3728, 3729, 3730, 3731, 3732, 3733, 3734, 3735, 3736, 3737, 3738, 3739, 3740, 3741, 3742, 3743, 3744, 3745, 3746, 3747, 3748, 3749, 3750, 3751, 3752, 3753, 3754, 3755, 3756, 3757, 3758, 3759, 3760, 3761, 3762, 3763, 3764, 3765, 3766, 3767, 3768, 3769, 3770, 3771, 3772, 3773, 3774, 3775, 3776, 3777, 3778, 3779, 3780, 3781, 3782, 3783, 3784, 3785, 3786, 3787, 3788, 3789, 3790, 3791, 3792, 3793, 3794, 3795, 3796, 3797, 3798, 3799, 3800, 3801, 3802, 3803, 3804, 3805, 3806,

国民経済との関連よりみたる国債制度(一)

Fund, New York, 1966 (rep.), p. 287. なお次の訳書をも参照。ヒューム著・田中敏弘訳、経済学論集、東京大学出版会、一九六七年、一四八ページ。

注(2) Richard Price (1723—91)の示唆によって、一七八六年にビットが創設した減債基金のプランができたといわれる。プライスの構想によれば国の歳入の一定額を減債基金として年々分離し、これをもって公債を時価で購入して償還する。そしてこれによって支払う必要のなくなった公債利子分をも公債の償還に充当すると、これが複利計算となり、長年の後には、膨大な額の公債が償還されることになるという。プライス著、An Appeal to the Public, on the Subject of the National Debt, London 1771. (前掲、フカロック編、文献集、所収) 参照。

恐るべき破滅を常時予言されていたにもかかわらず、国家債務は急激にかつ朗らかに膨脹した<sup>1)</sup>。しかも国家債務の増大は同時に国民の富裕と国力との向上をももなったのである。この輝かしい成果は個人々々をして国家信用のかなりふかい本質を感じせしめることになった。しかし彼らはおなじく誤って公債制度を一方的に誇張して賞賛してしまったのである<sup>2)</sup>。

(1) Karl Salomon Zachariä: "Über das Schuldenwesen der Staaten des heutigen Europas" in Pöhlitz Jahrbüchern, 1830, S. 195. [以下の引用では本書をツァハリエ、前掲書と略す]。

(2) Isaac de Pinto, Traité de la circulation et du crédit, Amsterdam 1771, S. 338. 公債の創設は……これをつくった人々さえもその神秘性をまったく理解しえなかった正金になった錬金術なのである、と。

国家信用に関する諸見解の発展と純化とは、国民経済の本質に関する洞察の深化とともに、換言すれば国民経済学の形成が徐々にすすむにつれてのみ生じたものである。すなわち国家信用学説は経済学説の驥尾に付すものであり、決してこの先をゆくものではない。けだし信用こそは国民経済的発展の最高段階をしめすものだから



である。

原始状態が克服されて人間の社会的共同生活がはじまるや否や、たしかにいたるところに国民経済が存在するようになる。人間は財貨の相互交換によって取引関係にはいり、またこれによって可能になった分業によって経済発展がはじまるのである。しかし国民経済は非常に徐々に、しかも一段一段と発展してゆく。そしてかなり高度の段階にいたってはじめて国民経済的意識と国民経済的法則の理解とが成立するのである。当面の対象に関連していえば、われわれは国民経済のより初期の段階をまず実物経済として、ついでこれを貨幣経済として観察しなければならない。しかる後に第三の最高段階としての信用経済がつけ加わるのである。<sup>注①</sup>かくして現実面では信用経済がはじまっているにもかかわらず、理論面では最初のふたつの経済体制とその相互連関とが漸次あきらかになりつつある状態であるといえる。これでは信用という新現象は当然理解されないうままにおかれてしまう。

注① 実物経済、貨幣経済、信用経済という経済発展段階論は一般に旧歴史派経済学者ヒルデブランドが有名にした発展段階論といわれている。参照：Bruno Hildebrandt, *Natural-, Geld- und Kreditwirtschaft, Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, Bd. 2, 1864.

国民経済学は成立後まだ日が浅いので、不断に進歩している国民の具体的生活の高さとおなじたかさにまで到達できてはいない。国民経済学はまだより初期の段階からはなれないのである。かくして国民経済学はいうまでもなく一部唯物主義的見方をもち、物的財貨、具相的・物質的生産の領域に自己限定せざるをえない。しかし信用はつぎの理由からとくに重要な意味をもつべきものであるとわれわれはおもう。すなわち信用こそは国民経済「学」が決して単なる物的財貨の学問ではないということ、むしろ知的・道德的人格をもつ人間と、そ

国民経済との関連よりみたる国債制度（一）

#### 国民経済との関連よりみたる国債制度(一)

これから生ずる人間の経済活動と経済行動様式のあり方こそが、国民経済「学」の主要な要素を構成するものであるということをあきらかに証拠だてるものだからである。後にまたこの問題にたちもどることにしよう。

上述した理由から、今日にいたってもまだ、多数の著作家たちは国家信用の利用にたいし大体拒否の態度をとっている。国債はすでに既存のものとなっているし、また不可避的なものであると考えざるをえないにもかかわらず、一般に国債は必要悪であり、できうる限りその作用を制限すべきであるとのみ考えたがるのである。国債の実際の利用価値をおおくの場合に認める人々もまたいる。しかし彼らは政府経済を一般国民経済から分離するとか、あるいはまた他の偏見にとらわれているので、国家信用の真の国民経済的意味の認識ができないのである。さらには国家信用の完全なる意味を把握しており、諸国家はそれに帰属する領域内で国家信用の積極的な利用をなすべきである、というものさえ少数ではあるが存在する。しかしこの場合にもまた国民経済の本質にもとづく「国家信用の」基礎付けはなされていないのである。

信用制度がもつとも広汎に適用され、それが非常におおきな成果を発現しえた国であるイギリスの事実、あるいは状態を一見しただけでもかかる諸見解への信頼はゆらがざるをえないであろう。イギリスは巨額の公債を成立させながらも不断に国民の富裕を増進させ、近代の最も長期かつ費用のかかる戦争を巨費をもって優勢裡に遂行した国民である。イギリス国民は信用という武器をもって戦ったので、巨額にのぼる年々の利子負担にもかかわらず諸国民にさきがけて富の軌道をまっしぐらに前進していったからである。この現象は非常に偉大なものであったので、信用制度の擁護者および攻撃者とも、おなじくこの現象を引合いに出さねばならぬと考えた。すなわち、信用制度の擁護者はこの現象を「信用制度の成果の」証明として叙述し、攻撃者はこれを「信用制度の成果で

S.6

はなく、例外ないしは特定状態の結果と叙述するわけである。この偉大な現象にたいするかかる解明のすべてはわれわれには不満であるといえよう。これらは、その内に一般国民経済的意味がねざしている、国家信用の内在的本質というものにふれていないからである。一体イギリスの目ざましい繁栄は信用制度の成果なのであるか。それとも信用制度とならんで他の同時的諸発展の成果でもあるのであろうか。はたまた信用制度があったにもかかわらず繁栄をもたらしたものと考えるべきであらうか。

本書の目的はかかる問題を解決するという点に存する。国家信用とその基礎の上にたっている公債制度とを、一般国民経済にたいするこれらの地位を顧慮しつつ考察することによってのみ、ここでは充分なる解答を与えることができるであらう。

かくしてわれわれの問題〔解決〕のために純国民経済的立場をきずくこと、これが本書の第一の任務たらざるをえない。これは従来の著作家たちがおざりにしていたものである。ついで本書はある経済的必然性をもつものとしての国家信用の本質を、国民経済の一般諸原則より導きだすことを任務とする。このためにはまず信用の本質一般と、これと密接な関連にある資本概念とに詳細に論及しなければならないであらう。かくて最後に、本書は発見された国債制度の諸原理を個々の事項に適用することを探求することになる。すなわちこの原理は、これらの事項への適用および遂行にあたつて顧慮すべき原理のことをいうのである。

## 第二章 国民経済的立場

政府は主として緊急やむをえない場合にのみ借入れに訴えたという事情から以下のような一般的かつ一面的見

国民経済との関連よりみたる国債制度(一)

S.7

## 国民経済との関連よりみたる国債制度(一)

解が生じた。すなわち国家による信用の方法での資金調達は緊急時においてのみなされる例外的方便であり、あらゆる手段でもってこれを避けるよう努力すべき必要悪なのである。それ故よりよい時期が到来した暁には借入資金を返済すべきことはよい政府というものの最高の義務なのである、と。

さらに国債が従来ほとんど戦争目的のためにのみおこされたという状態からして、またとくにイギリス国債は十八、十九世紀をつうじてくりかえしおこなわれた激しい戦争によって成立したものであるという状態からして、信用制度は一大非生産的消費を可能にさせたものとして激しく非難されたのである。

国家信用制度に関するかかる好意のない見解の生ずる所以は、主として国民経済の伝来的見解から生じた全く正しいというわけではないふたつの根本見解に由来するのである。すなわち

一、政府経済の一般国民経済からの理論的分離。この理由から政府経済の使用するもののすべては国民経済から取去ったものであるという根本見解が生ずる。

二、生産性と非生産性の見解。ここからすべての政府消費は非生産的である、という命題が引出される。

第一の見解についていうならば、この見解は一部分つぎのような事実からあきらかになるであろう。すなわち、国民経済を認識しこれをひとつの体系的全体として考察するようになった以前に、すでに政府経済というものを独立の存在として認識し、学問的に論ずることにながいが間慣れてしまっていたという事実である。かくて爾来国民経済を内的法則によって有機的に生じた独立の国民の経済生活と理解してきた。この国民の経済生活は文化の発展とともに始めて台頭してきたものであった。しかるに他方これと並んで政府経済、およびそもそも国民経済の発展と調和的ではない国家は、これとは別な自己の恣意と自己目的のために存在するものであり、そしてそ

の入用を一般国民経済から暴力的にとりさるものと理解されたのである。

国民経済の両部門についての極端に欠陥だらけの一面的な見解がここから展開された。財政学は政府経済をほぼ政府の入用調達上の技術としてのみ考察した。この場合、一般国民経済におよぼす政府経済の影響については、ただ副次的にのみ顧慮されたにすぎなかったのである。これに反し国民経済は個々の生産的事業の総計として考察され、ここに展開された個々人の活動のみが国民経済の領域にふくめられたにすぎなかった。のみならず政府経済が国家秩序を維持することから生ずるところの、国民経済の全構成員にたいしてもつおおいなる重要性についても看過されてきた。かかる立場からすると、国家は国民経済の外部に存在するものであり、租税などすべての国家への公課は国民財産への負担とみられるにちがいがなかったのである。かくて国民経済の著作家たちが国家信用制度にたいし断乎反対の言明をしたことも、また全く自然のなりゆきであった。すべての国家支出は国民財産の減少という結果をうむ。しかるに国債は他の方法では達成不可能なほどの国家支出の非常な増大を可能にさせるものだからである。かくて公債は、もし政府経済にとられなければ国民経済のもとに残ったであろう財をとりさってしまうが故に、政府経済の最も破滅的手段とみなさるべきものであらう。もしわれわれが従来の理論に与して物的財貨の生産の量を国民経済の主目的と解する限り、また政府経済の有用性と必然性とを真剣に顧慮せず、ただできる限り政府消費を制限することを指導的原理とところえている限り<sup>1)</sup>、この欠点は一般的かつ絶対的なものである。

- 1) アダム・スミスおよびスミス学徒たちはこの立場にたっている。大多数の著作家たちがこの概念の下に入ってしまうので、ここでは彼らひとりひとりの名をあげないことにしよう。

国民経済との関連よりみたる国債制度(一)

S.10

## 国民経済との関連よりみたる国債制度(一)

国家信用制度にたいしておおくの人々があびせる非難は、政府が信用によって使用可能になった巨額の資金の使用や、犯しうべき不当使用に通例関連している。いうまでもなく収入が大となればその収入をより一層不当に使用することが可能となる。しかしこの非難はさしあたり信用そのものにたいして向けられるべきではなく、政府の政治目的や政治意図、あるいは無能または非道徳性に向けられて然るべきものである。あきらかにこの場合には手段と目的とのとりちがえがおこっているわけである。

かくて現存政府への政治的憎悪からする著作家たちの信用体系への非難は全く無効なものとなるであろう。前世紀、とくにピットの時代にイギリスの野党が信用制度が政府におおきな力を与えるところからこれに反対を唱えたことは周知のところである。同様に J・B・セネが公債制度に激しい攻撃を加えた所以も主として彼が政府に反対の立場をとっていたことの一結果であるとおもわれる。

1) Jean-Baptiste Say, Cours complet d'économie politique pratique, 7 vols., Paris 1828—33, T. VI, Ch. XII.

国家経費の目的とその調達のための手段とのかかるとりちがえによって短期(流動)公債への好意的判断と、アダム・スミス以来最近までしばしばみられる長期(確定)公債への激しい非難の理由の一部はあきらかになるであろう。彼らはこう考える。短期債にたいしては政府は償還を考えねばならない。本年度支出しすぎたとおもえば来年度にはその分だけ経費を節約しなければならないであろう。ところが確定公債ではその必要がないので政府にとっては収入の浪費や不当使用が容易化されることになる、と。後述するようにこれは事情が逆なのである。イギリス公債の成立史がしめすとおり、元来確定公債は流動公債の不断に長期化されたものとみなしうべきものなのである。

1) 最近でも J・S・ミルは J. S. Mill, *Principles of Political Economy*……, London 1848. [以下の引用ではミル、原理と記しておく] 第二巻、四三二ページで「これは（国庫証券の発行は）重宝な方策である……」とのべている。そのくせ彼は確定公債にたいしては激しい反論を展開しているのである。

国民経済のかかる一面的見解と、もうひとつの既述した誤れる見解とは密接に関連している。しかもこの誤れる見解からして著作家たちは国債は非生産的に消費されるものだという判断に到達していたのである。

### 一、国家消費の生産性

いまここで生産性、非生産性に関する一般的な論争を完全に論じつくそうとまではしなくてもよいであろう。これについては他のところで論ずるつもりである。ここではただ本書の対象にとって不可欠なる諸事項のみをとりあげるにとどめたい。

たとえわれわれが国民経済の領域を物的・具相的財貨の生産と消費とに限り、人的サービスや非物質的財貨を全く除外しようとしたとしても、なお政府経済の消費は徹頭徹尾生産的なものであるということを容易に証明することができるであろう。生産的労働は、その円滑なる統行と財貨生産という目的の達成のために、他の諸条件とならんで外的暴力の影響から保護されることをも必要としている。<sup>1)</sup> すなわち労働過程の阻害、遅滞、悪化やあるいは労働生産物の破壊、すくなくともその価値減少となりうるか、またなるべく意図された外的暴力から生産的労働を守る必要があるのである。この暴力は自然的暴力のこともあり、また人的暴力のこともある。かくて労働にかかる暴力による諸障害から保護することは生産の必須条件であり、この保護達成のためになされた財の使用は生産的であると考えるべきである。

### 国民経済との関連よりみたる国債制度（一）

## 国民経済との関連よりみたる国債制度 (-)

- 1) 以前の学者たちは、この本質的要件を暗示したにすぎなかったが、J・S・ミルにいたって、はじめてはっきりととりあげられた。「生産のために資本のなすことは、労働が必要とする庇護、保護、道具、材料を与えることである」と。ミル、原理、第一卷、六七ページ。

自然力に對する保護施設に關してはこれが生産性について誰も疑問を感じず、また誰もがこれについて異議をさしはさまないであろう。それ故、事業用建築物、作業場、倉庫は一般に生産設備のうちにかぞえられる。もし労働と労働生産物とが風雨、太陽などによるおこりうべき悪影響から保護されなければ、生産物の価値は減少するか、または無価値のものでしかなかったらうからである。

人的暴力行為にたいする保護施設の場合には、いままでは自然力に對するものと同様な結論には達していなかった。それら施設は大部分の人々からは非生産的であると見なされていたのである。人的暴力はたしかにおもに財貨の奪取に向けられていた。しかし財貨の部分的価値破壊をもたらすだけの結果におわることもときどきあった。人的暴力は労働者をして労働活動を中断させ、その攻撃から身を守ることを必要とさせる。そのためつねに人的暴力は労働行為を妨害する作用をしたのである。かくてそれは労働者を肉体的に傷つけることによって労働力を弱めるか、これを全く駄目にしてしまふか、という長期的持続作用をもつこともときどきあったのである。

ある種の破壊にさらされておつたものであつて、しかも維持されるようになるものか、すべては、あらたにつくられたものとおなじである。もし保護的力、維持的力の作用がなかったならば存在しなかつたであろう財貨というものがここに存在することになるのである。かくて、この力とこれを生むための支出とは生産的と考えなければならぬ。このことは労働生産物保護の場合にもまた労働者保護の場合にもひとしく妥当するであろう。生産



的労働者を維持するためのすべての支出は生産的なのである。<sup>1)</sup>

1) これに関してはミル、原理、第一巻、五一ページおよび五七ページ以下、総じて第二、第三章を参照のこと。ミルはたしかに富 (Wealth) の概念をも蓄積できる具相的財貨に限定した。それゆえ、かかる財貨を生産する労働のみを生産的と名づけたのである。その限りでは芸術家、司法官、医師など人的サービスをおこなうすべての人々は、ミルにとっては生産的労働者ではない。しかし彼らの労働が生産的労働者の養成、維持という結果をうむようになるやいなや、その労働が物的財貨生産の増大に間接的にはあるが、協力するという理由で生産的労働者となるであろう。この場合、ミルは精神労働をなす身分の人々の活動を生産的部分と非生産的部分とに区分することが全く不可能であるという点を看過している。イギリス国民精神は彼にいわば「富」の言葉のうちに具現されているような国民経済の唯物的見解から離れることを許さなかった。しかし彼の洞察は、すくなくとも間接的にはあるが、彼自身をして非物質的財貨の価値を認めることを余儀なくさせたのである。 Wilhelm Roscher, System der Volkswirtschaft, Bd. 1, Die Grundlagen der Nationalökonomie, Stuttgart 1854, §. 61 u. 63. 「以下の引用はロッシェン、体系と略記する」をも参照のこと。

牧羊群に牧夫をつける場合のように、ちいさなものの場合には保護施設の生産性は十二分に承認される。そしてその施設のための支出は決して非生産的とはみなされないであろう。しかしおおい施設の場合にはその生産性を見誤ることになる。国家秩序のため、および外敵にたいする保護のための支出にたいしその生産性を認めることを拒否することになるのである。

人的暴力行為の悪作用から国民経済を保護する最重要な施設は国家である。国家は国民の平穩なる労働活動を守り、またその生産物を個人による妨害や破壊からも、また外敵による一般的攻撃からも守るのである。牧羊群

国民経済との関連よりみたる国債制度 (一)

#### 国民経済との関連よりみたる国債制度(一)

に牧夫のいない場合とおなじく、もし国家秩序と国家秩序を保護すべき武力とがなければ国民経済は存続しがいであろう。

国内的平穏と秩序の維持のための費用、および悪人や犯罪者による個々の攻撃から人間と財産とを保護するための費用は比較的寛容に評価されるであろう。人々はその費用の有用性を承認し、その費用を一般国民経済から調達すべき必然性があることも認めるであろう。しかし一休憲兵は経済的に生産的であり、陸軍はそうではないというべきであろうか。憲兵もすべての司法官や官僚とおなじく、さもないれば各個人が自己の労働と財産にたいして自分でなすべき保護を代行し強化しているのである。彼らはこれを一層完全にかつよりすくない費用支出でなしとげるのである。まさに同様に陸軍と戦争のための支出とは国家と国民経済の外敵からの防衛を引受ける仕事をしている。さもないればこれは個々の国民の負担となり、しかも国民各自がこれをなす場合にはよりおおきな犠牲をもってしても、なおちいさな成果しかあげえなかったであろう。

戦費、の非生産性は公債制度に反対する一主要議論として使われてきた。何となれば、いうまでもなく公債は従来主として巨額にのぼる戦争のための入用の調達のために使用されてきたからである。かかる見解はあたかも戦争が回避しうるものであるかのごとき仮定の上にたっている。しかしこれは思いちがいであろう。経済的観点からすれば、戦争は破壊的な自然災害とおなじく、経済にとつては与件たるべき事実上存在する状態、あるいは諸力の結果としてあらわれるものである。経済にとつてはかかる力を他の現存するあらゆる自然力とおなじく、それだけの性格にしたがつて利用しうるものにする、または害のないものにする。ことこそが肝要なのである。防衛のためにおこなわれる場合、戦争は富の維持と生産的労働の円滑なる続行の維持に資する。もし戦争をおこ

なわなかつたならば破壊されてしまつたり、または生産されなかつたであろう財貨のすべては、戦争との協力によつて生産されたものと見らるべきものである。攻撃戦としての戦争は国民経済的發展にとつての利益を獲得するためにか、または将来の経済發展への攻撃を防衛するのに役立つであらう。両者の場合いずれも戦争は国富の維持増進という目的をもっている。第一の場合には価値ゆたかな領土または有利なる地点の獲得、あるいは商業戦として従来鎖国していた国への通商路をひらくことを目的とする。第二の場合には戦争は諸国家間の均衡を維持し、自国の経済發展が後日危険にさらされるかもしれない他国の国力の増強を阻止することを意図しているのである。

かくて戦争は与えられた状況下では必然的につきおり発生する事件なのである。それをいけば不法にも国民経済に負担をかけ、国民経済の生産物をもまた破壊させる異常な事件として考察するのは適切ではないであらう。戦争のための支出もまた国民経済の一般的生産費に属する。この費用を減じ、この支出を国民経済にできるかぎり害のすくないように調達することこそ戦争に関する最高の経済的観点たらねばならないのである。この観点は公債制度によつて実現されるであらう。

物的財貨生産に直接に資するような他の目的のためにもし国家が借入金によつて巨額の支出をしたならば、この場合政府のかかる消費は決して非生産的であるとはいわれないであらう。たとえば国家が公共の交通施設、国道、運河、鉄道などの建設のために経費支出する場合がこれにあたる。この場合には公債の反対者たちもこの公債を誤つて非生産的消費の促進手段と判断することはないであらう。しかしながら、この場合でもまたもし国家が他の非生産的経費といわれているもの、たとえば公共教育や文化のための経費支出を節約するか、完全に取り

S. 15

## 国民経済との関連よりみたる国債制度(一)

やめるかするならば、公債を避けえられなかったであろうか。しかしこれらの経費は単に物的財貨の生産という観点からさえも生産的である。それ故かかる〔非〕物質的財貨を国民経済からしめ出そうとする人々も、これら財貨を保持できることを希望するであらう。教育は労働者の労働力を改善し、宗教は国民の道徳向上に影響を与える。これによって生産にたいする安定状態は高められるのである。

かくてわれわれがいまその誤謬をあきらかにしようとして、このふたつの見解からするさしあたりの結論は国家は可能な限り消費をすくなくする、政府経済は財貨をできるだけすくなく取りたてかつ使用せねばならぬ、そうすれば国民は自己の手にのこった財貨の価値の分だけよりゆたかになるからである、という結論である。この見解が全く外面的なものであり、かつ国民経済の本質を全く把握していないものであることは後述するであらう。この見解によれば、以前よりある施設、あるいは国家の政治的機構が不可避免的に必要とする経常的経費はあきらかに調達されなければならないであらう。しかしそうなればなるだけ、収支の不適合をもたらす可能性のある臨時費の支出をさけるべきであるということになる。もしひとたび状況の圧力から不均衡ができてしまったならば、再び均衡にもどすべくあらゆる努力をほらうべきことになる。そして節約こそが（すなわち他の合目的経費支出の中止といった方がよいかもしれない）、このため最上の手段として推賞されることになるであらう。

かくて本来的に国民経済とのあらゆる内的関連を欠き、しかも全く私経済的精神から、どうしたら政府入用を最もよく調達しうるかということのみを考慮する財政政策的立場が展開することになったのである。この立場からすれば既存の公債は経常所得に何らの貢献をしないにもかかわらず、継続的利子という形でその年の経常所得から調達すべき負担とおもわれるようになる。それゆえこの負担は、よりよい家政管理者であれば回避すべき

のとなるのである。さらには善意の意図から付随的に国民経済への影響をはかろうとし、しかも国民経済にたいする不利益をしめすこともたしかにある。しかしこの場合にもつねに国民経済と政府経済とは分離されたままのものと考えているのであり、内的かつ解消したい両者の関連については気づいていないのである。

## 二、個別経済と総体経済

いまやわれわれは政府経済と一般国民経済との正しい関連を規定し、これによって国家信用制度を判断するための正しい立脚点をきざくことにとめようとおもう。

国民経済とは、国民の全個人が彼らの入用充足と目的実現のための手段を、彼らすべての人々の統合され結合された活動によって、共同に調達するために結合したものである。ここで「国民」とはまず外的紐帯による——共通の出自（血縁）ないし、共通の居所（地縁）に結びつけられている——個人の複合体をいう。

国民経済はまず主として個々人が独立にその目的を追求する個別経済<sup>1)</sup>から成りたっている。これら個別経済同士は交換と分業という紐帯によって互いに非常に密接に結びついているので、本来個別経済が互いに分業および交換の關係に立つ限りこれは国民経済的統合の一項を構成するものといえよう。それ故分業のそれぞれの相当の進歩は国民経済の一発展段階をしめすのである。

- 1) 私経済を他人と全然没交渉の個々人の経済と解釈することによって、私経済と個別経済とをたくみに区別することができる。私経済は「入用と給付とが不断に結び、かつ解かれている生々とした關係の網である」国民経済の対立物をなしている。Friedrich v. Hermann, Staatswirtschaftliche Untersuchungen……, 1. Aufl., München 1832, S. 9. 参照。

国民経済との関連よりみたる国債制度（一）

## 国民経済との関連よりみたる国債制度(一)

しかしながら個別経済で生産するのが適当でないような一定量の財貨や人間的目的の達成手段が存在する。すなわち絶対的に個々人の力にあまるので各自がこれを全然つくりだしたくないか、または利益が費用をつぐないえないので個々人がすくなくともそれをつくりだしたくないような財、さらにはこれの生産に国民経済の総構成員が非常に強い関心をもっているので、その財貨の生産にかんして他の者に依存するようになりたくないような財などがこれである。

ここで自然的かつ必然的に国民の総構成員のための総体経済、というものが生れてくる。総体経済は独特の性格をもつ財貨をすべての人々のためにつくり出すことを使命とするものである。その生産手段は同一の、あるいは比例的なある基準によってすべての人々から齟齬出される。そして生産された財貨をさきとおなじ基準によってすべての人々が消費するのである。

ここではまず総体経済についてのみ論ずることにしよう。後に詳述するように、これが個別経済と最も密接なる有機的関連をもつにせよ、今われわれの問題は総体経済のみに関連するからである。

総体経済の重要性は既述のような特殊の財貨を生産する点にのみ存するのではない。むしろこれは主として進歩している国民経済のもとで、すべての個別経済の共通の基礎を形成させる点に存するのである。すなわちこの共通の基礎によってはじめて個別経済がまさに真の国民経済の構成員としての性格を保持し、これによってはじめて個別経済にたいし、純粹なる私経済とはことなつて、人間の入用と目的との達成のための、より高い程度の活動を展開させる能力が与えられるのである。すべての個別経済のかかる共通の基礎は、国家秩序であり、社会状態である。ある程度の安定性と永続性をもつ状態のもとでのみ、はじめて交換や財貨生産の発展というものが期

S. 17

待できるからである。安定状態が増大すれば個々人が自分で自分を守る必要性はますますなくなり、個々人は生産の成果を確実に享受できることになるので、全手段と全力をもって生産拡充につとめることになる。かくして安定状態の増大と国民経済の進歩とは密接なる関係が存することになるのである。それゆえかかる総体経済は人間文化発展のための最も一般的なる基礎であり、かつ最も普遍的な形態でもある。

総体経済の機関は、国家であり、この点にこそ国家の真の、しかも唯一の意味が存する。独立に経済活動を営む人々のみが総体経済の構成員でもある。すなわち、彼らは国民 *Staatsbürger* なのである。総体経済の運営にあつたの彼らの協力程度は、利益を引出し、またそれに応じた輸出をもするところの総体経済にたいし彼らがどれほど利害関係があるかというその程度から生ずるであらう。したがってその程度はさしあたり個別経済のおおきさによるといえる。国家はこれら個別経済のすべてを一樣に保護しまた援助もするからである。

近代法、治、国家にあつては、国民の総体経済の中央機関としての国家の意味はそれ以前の国家の形態の場合よりもより明瞭にあらわれる。生産手段の共同のしかも相対的に同等なる調達、効用の平等の享受にもとづく共同の消費、これこそ近代国家の経済原理なのである。

かかる見解にあつては総体経済あるいは政府経済は、その目的と生産性に関しては個別経済と同列にある。両者はともにある全体、すなわち一般国民経済の構成部分である。総体経済と個別経済の両者は相互に分離して存在するものではなく、むしろどこでも、またいつでも相互に最も密接に癒着したものであるから、互いに相手なしでの存在は考えられない。

すべての国民が総体経済の運営に直接参加することは不可能というものである。中央政府が全体の代理執行人

## 国民経済との関連よりみたる国債制度(一)

としてその直接的運営を引受けることになる。

経済という語をわれわれは目的達成に役立つ活動の全体、すなわち目的達成のための手段調達活動の全体と考えよう。さらに経済とは、個々の手段の生産と適切な管理および最終的使用とも理解すべきである。

最も基礎的なものから最高のかつもっとも崇高なる入用にいたるまでの充足という、すべての人間的目的の実現のためには物質的諸活動、財貨の使用ということを必要とする。最も原始的なるものかならずしも全く物質的なものであるとはいえないし、また最も高度なるものかならずしも全く理念的なるものであるというわけでもない。理念的性格を非常におおくもつと思われがちな国家目的についてもこのことは妥当するであろう。

かかる目的達成のための手段の調達と使用こそは、政府経済の任務でありまた対象でもある。

すべての国民経済とおなじく政府経済もまた原始的な端緒より漸次より、高度の完成へと進展していった。もつとも不完全あるいは欠点だらけの国民経済的認識しかもたぬ端緒においては、政府経済は個々の国民の貢納義務や利益享受権の点でも不当たらざるをえなかったし、その目的達成についても不完全かつ不経済たらざるをえなかった。政治的改革過程が非常にすすんだ今日では負担の公平、目的達成の完全性、国家の生産した財のすべての人の利用や享受の公開は政府経済の公認された原則であり、またその目的に適合しているあらゆる政府権力の最も努力するところなのである。

この発展行程において政府経済は一般国民経済とおなじ段階を通過する。政府経済においては実物経済には国家への現物納と備役制度とが相応し、貨幣経済には租税制度が相応する。第三の国民経済段階としてわれわれは信用経済を知った。これは個別経済間の交流のうちに非常に発展したものであり、学問的にも「信用経済の正当



性」は承認されているのである。これに反し政府経済のおこなう信用の利用については学問はその正当性の承認を拒否する。しかしもし総体経済が完全性への発展において一般国民経済と同一歩調をとるべきであるならば、総体経済もまた初期の諸段階を完成してしまつた後は信用制度に移行することができるのみでなく、まさに移行すべきではなからうか。

現実生活はすでにこの問題を事実上解決してしまっている。すなわち現実生活は国家信用を経済的必要物として諸事物の自然的行程から発生せしめた。そして社会(Staatsgesellschaft)は国家信用の祝福を受ける権利があるか否かを問うことなしに、これをわがものとしてしているのである。

学問的認識は現実生活の諸現象を理解し、これを真の本質から把握すべき任務をもっている。もし諸事実と、諸制度についての学説とのながく続いた矛盾が事実の不条理や矛盾にもとづくものであるというよりは、むしろ学説の一面性にもとづくものであらうということを確認するならば、われわれは国家信用を制度として適用するにあたり、これをかなり高い経済発展のもとでの必然的現象として叙述し、「国家債務」を国富の印として叙述するようつとめたいとおもう。

国家信用の概念を獲得するためにわれわれはさしあたり信用の本質一般について一瞥しておこうとおもう。しかしわれわれはここでもまた、われわれの任務達成のために必要な範囲に限定しなければならぬ。何となればもしわれわれの注意をひいている「信用という」一般の問題について国民経済学にたいするその全き意味までをもここで論じようとするならば、これはわれわれに付されている限界をはるかにふみこえてしまつたからである。